

「ねえキリトくん
私のおなかズリ気持ちいい？
気持ちいいよね？
だって粗末な負け犬おちんちん
ガッチガチになってるもん」

柔らかいお腹が勃起した男性器に押しつけられる
十八目ぶりに直操帯から解放されたモノは
アスナの変わり果てた痴態に
痛いくらいに興奮していた



『あっアスナの……』

『アスナ様でしょう？
いつまでも彼氏気分でないでね』

アスナの華奢な手が俺の首にかかる
ゆっくりとだけと確実に首が絞められていく

酸欠の苦しみに比例するように
アスナの顔に嗜虐の笑みが浮かんでいく

『首を絞められて勃起するなんて
ホント変態なんだから♥
まだ射精しちゃダメだからね♥』



「きゃっ♡ご主人様っ♡
あっ♡挿入っ♡きたあっ♡」

アスナの腹が内側から押し上げられて
硬い感触が伝わってくる

ドクンドクンと
力強く脈動するオスの象徴

最愛の女性の肉越しに
自分よりもはるかに優れたオスを感じる
感じてしまう



「んあっ♡ ぐっ♡ しゅっ♡
キリト君の粗チンとぜんぜんちがうっ♡
子宮♡ 届いてっ♡ 潰れりゅっ♡」

アスナの目にはもう俺は映ってない
媚びを売るような下品な笑顔で
飛び散ってきた唾液を俺は舐めとる

ピストンのたびに強い強いオスを感じる
惨めさがそのまま興奮に変わる
いつの間にかそうなってしまうていた



ドクドクドクドクッ
アスナの内側が勢いよく穢されていく

アイッ♡ イクッ♡ イグウッ♡
子宮♡ 破裂しそっ♡ イグウウウっ♡」

アスナの絶頂とともに首が強く絞められた
苦痛と惨めさで俺は射精した

先に射精がはじまったはずなのに
俺の射精が先に終わる
アイッは何秒も十数秒もかけて
アスナの中に勝者の遺伝子を注いでいく

















